

田植え後の低温で生育に遅れ

～ 浅水管理で分けつの確保を！ ～

1 気象経過と作業状況



【気象経過】

5月は低温傾向で推移し、日照時間もやや少なく（平年比88%）、降水量はやや多く（平年比127%）になりました。また、5月25日の最高気温は13.5℃と、かなり低温になりました。

【作業状況】

田植作業の始期が5月16日（平年差3日遅い）、盛期が5月23日（平年差2日遅い）、終期が5月31日（平年差3日遅い）でした。

2 生育状況

6月10日現在の管内水稻定点調査ほ（あきたこまちR：9地点）の生育は、平年と比較して、草丈はやや短く、茎数は少なく、葉数はやや少なくなりました。

茎数が少なくなっている要因は、低温、日照不足による葉数の展開の遅れに伴う分けつの発生の遅れによるものと考えられます。

○定点調査結果（6月10日）

	草丈(cm)	茎数(本/m ²)	葉数(葉)
本年	23.6	103	5.6
平年	26.6	145	6.3
前年	25.3	132	6.3
平年比	89%	71%	-0.5葉
前年比	93%	78%	-0.5葉

※平年は過去10力年の平均値

3 分けつの発生を促進する水管理と適期の中干し

本年は、茎数が少ないほ場が多くみられます。目標収量の確保のため、分けつ発生を促す水管理を行い、早期の茎数確保に努めるようにしてください。

【分けつの発生を促進する水管理】

○分けつの発生は昼夜の水温較差が大きい場合に促進されます。そのため、浅水管理を行い水温と地温を高めて日較差を大きくします。ただし、田面が露出しないように注意してください。

○かん水は水温の低い早朝に短時間で行い、日中は止水管理を行ってください。

【適期の中干し】

- 中干しは、無効分げつの発生を抑えるとともに、根の活力を高めて1穂粒数と千粒重を増加させる効果があります。下図を参考に、生育状況を見ながら中干しを開始してください。
- 目標茎数である450本/㎡（下図参照）が確保できたら、中干しを開始するようにしてください。
- 落水やその後の入水をスムーズに行うため、溝きりを実施しましょう。

＜図：茎数と中干し時期・程度の目安＞

目標茎数	中干し開始時期	中干し・溝切り	中干し後の管理
450本/㎡程度 ○21.2株/㎡ （坪70株）の場合 →平均茎数21本/株 ○18.2株/㎡ （坪60株）の場合 →平均茎数25本/株	○450本/㎡以上 →直ちに中干し ○450本/㎡下回る →浅水管理や間断かん水で茎数確保	○中干し期間 （7～10日程度） ○軽く亀裂が入り、足跡がつく程度 ○溝切りの実施	○溝切りを活用した間断かん水の実施

4 いもち病防除（オリゼメート粒剤の散布）

初期の発病を抑えることは、その後の葉いもちの発生や穂いもちの伝染源を減少させます。葉いもち防除として箱施用剤や側条施用剤を使用していない場合は、6月15日頃（6月12～18日）にオリゼメート粒剤を10a当たり2kg散布します。湛水状態で散布し、散布後4～5日間は入水せず、7日間は落水や掛け流しをしないでください。

補植用余り苗は、いもち病が発生しやすく周辺ほ場への強力な伝染源となります。
ほ場に放置されている苗が散見されますので直ちに泥に埋めて処分してください。

5 斑点米カメムシ類対策

- 本県の主要加害種であるアカスジカスミカメは、イネ科雑草、ホタルイ類等の穂に産卵するため、これらの雑草が畦畔や水田内で繁茂すると多発し、斑点米による被害が大きくなります。
- 本年は雑草の発生が早く、一部では残草しているほ場も見られます。初中期一発型除草剤で雑草を抑えきれなかったほ場は、発生草種やほ場の湛水状況に応じた中・後期剤の散布を行ってください。
- 斑点米カメムシ類の生息地を減らすために、農道や畦畔、休耕田、雑草地などの草刈りを出穂10～15日前までに数回実施します。

★お知らせ★

秋田米栽培情報発信LINEにて、水稻栽培に関する情報をリアルタイムで発信しています。（秋田県内の水稻生育情報、水稻・大豆の技術情報、異常気象対策等）

ぜひ、こちらのQRコードより友達追加をお願いします→



不明な点がある場合は、山本地域振興局農林部農業振興普及課（TEL52-1241）までご連絡ください。